

含め、一般および関連施設に対して行った。参加申込受付は同担当と栃木県立がんセンター（以下、「栃がん」とする。）相談研修課が行った（資料②）。また、栃がんHPでも提示した
<http://www.tcc.pref.tochigi.lg.jp/other/18.html>。

ii) 参加者へのアンケート調査

アンケート調査（資料③）は研究班および栃木県が分担した。

（倫理面への配慮）

無記名でのアンケートであること、アンケートへの回答は自由であることを説明し、同意書に署名を行う対応とした。

iii) 文書・動画での記録

文書・動画記録は研究班および栃木県が分担した。

（2）地域・院内に向けて「患者必携」の周知・普及

①地域保健福祉等関係職員研修会

i) 県南健康福祉センター研修会

ii) 県東ケアサービス関係職員研修会

「患者必携」周知および在宅療養支援者との連携を目的とした講演研修後にアンケート調査を施行した（資料④⑤）。

②栃木県がん診療連携協議会「相談支援部会」における説明

定期開催の相談支援部会において周知・協力を図った。

③院内への周知

「患者必携」見本版などの配布に合わせ計画した。

（3）次年度に向けた取り組み

①アンケート調査による評価

アンケート調査協力を前提として、対象を患者・家族、医師、コメディカルとして「患者必携」を配布し、アンケート調査を行う。

②「地域の療養情報」改訂に向けた取り組み

栃木県に特化したホームページ『がん情報とちぎ』を立ち上げ、「地域の療養情報」の改訂を検討する。

C. 研究結果

（1）市民公開講座『がん「患者必携」－栃木の取り組み－』の開催と記録

①市民公開講座開催設定と記録の発信

i) 栃木県立がんセンターHPでの公表

2010年11月7日に開催された。『がん「患者必携」栃木の取り組み』としてHP
<http://www.tcc.pref.tochigi.lg.jp/other/19.html>で供覧可能とした。

ii) 参加者へのアンケート調査結果

参加者は189名であった。内訳は、一般76名、医療従事者（介護従事者含む）49名、教育機関（学生・職員）43名、行政4名、スタッフ17名であった。アンケート調査には76名からの回答があった。自由記載では、基調講演のうち「がん患者／ジャーナリストの立場から：乳がん闘病体験から考える患者支援と最近のがん対策の動き」読売新聞社会保障部 本田麻由美記者の講演に対して「Cancer Survivorshipや患者自分自身のAdvocacyなど共感や学びを受けた」というように多くの反響がみられた。また、「「患者必携」の目的は、あくまで患者各々が自分

の病について必要な情報を集めるためのものであり、医者と患者とのコミュニケーションを媒介し、患者自身が学び成長してクオリティオブライフを高めていくための第一歩であると感じた。」という深い理解を示した意見もあった。

iii) 文書・動画での記録

全体177分のビデオ(DVD版)に編集した。しかし、栃木県立がんセンターHPにはシステム上収載不可能であり、関係施設(栃木県拠点病院相談支援センター、県内健康福祉センターなど)に郵送配布した。班会議でも患者・家族へ情報提供或いは県庁との協働事業を提示する目的のため希望される班員施設があった。

(2) 地域・院内に向けて「患者必携」の周知・普及

①地域保健福祉等関係職員研修会

i) 県南健康福祉センター研修会

2010年11月04日に行なわれた。講演研修後にアンケート調査を施行し、参加者30名から回答があった。その結果を示す(資料⑥)。職種は看護師17%、保健師63%、介護支援専門員20%であった。参加動機(複数回答可)は、「②地域におけるがん患者支援について知識を深めたかったため」、「①がん対策の最新情報について知りたかったため」がおのおの80%、57%であった。研修会の内容は、「大変参考になった」「参考になった」が20%、80%であった。「今回の研修会の内容は今後のがん患者支援に活用できるか」の問いに対して、「活用できる」「十分活用できる」が70%、17%であった。

内容・活用に関する感想などには、「“患者必携”を使用しながら患者、家族、主治医、訪問看護等サービス事業所の担当者とも連携を図り支援できると思った。」「がん相談支援センターの存在と場所の情報が得られた」などがあった。

ii) 県東ケアサービス関係職員研修会

2010年12月9日に行なわれた。講演研修後にアンケート調査を施行し、参加者65名から回答があった。その結果を示す(資料⑦)。参加者の勤務事業所別は居宅介護保険関係72%、地域包括支援センター11%などであった。テーマ設定は、「良い」「おおむね良い」が89%であった。理解度は、「概ね理解」から「十分理解」が100%であった。自由記載では、「がんセンターが身近に感じ、医療連携の強化をしていきたい。ケアマネとして足を運びたい。」「顔の見える関係ができればと思う。」など連携強化につながる意見があった。

②栃木県がん診療連携協議会「相談支援部会」における説明

2010年7月7日および2011年1月20日に平成22年度第1回および第2回相談支援部会が開催された。本研究班の経過概要と「試作版」試験配布の結果について説明が行なわれた。また、「地域の療養情報 栃木版」の改訂の必要性について説明と協力依頼がなされた。

③院内への周知

2011年2月に「患者必携」見本版ががん診療連携拠点病院宛てに送付された。3月に予定されていた書店などでの市販本の販売に合わせ、患者・家族よりの質問に備えて常勤医師・研修医全員および関

係部署に配布するとともに、相談支援センターや患者図書室「こやま文庫」で閲覧可能な状態とした。

(3) 次年度に向けた取り組み

① アンケート調査による評価

アンケート調査協力を前提として患者に「患者必携」市販本を無料提供し、「患者必携」を使用することで活用度などに関する患者による評価と医師による臨床情報を組み合わせ総合評価する。また、患者・家族支援者であるコメディカルを対象にした研修会において「患者必携」の使い方の実践をワークショップ形式で行い、研修後のアンケート調査により支援ツールとしての有効性や改善点などを評価する。

② 「地域の療養情報」改訂に向けた取り組み

栃木県におけるがん情報をインターネットにて提供するために栃木県に特化したホームページ『がん情報とちぎ』を立ち上げる。その一環として「地域の療養情報」の改訂版をホームページ上に提示すると共に、状況に応じて冊子形式の印刷を検討する。

D. 考察

2007年（平成19年）4月にがん対策基本法が施行され、それを受け同年6月にがん対策推進基本計画が策定された。基本計画を実行すべくがん対策推進協議会が立ち上げられ、種々の事項について検討が行なわれた。それらの中に「インターネットの利用の有無に関わらず、得られる情報に差が生じないようにする必

要があることから、がんに関する情報を掲載したパンフレットやがん患者が必要な情報を取りまとめた患者必携を作成し、拠点病院等がん診療を行っている医療機関に提供していく」ことが提言された。国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部（「効果的ながん情報発信と活用のための支援と整備」がプロジェクトの1項目）がそれを受け『がん「患者必携」』作成・配布の政策的事業が開始された。同時にこれら事業が効果的・効率的に行なわれるように支援・評価・提言を行うために主任研究者の研究班が立ち上げられた。支援の具体的内容として、国民の不足感が強いがん医療に関して、病気や治療に対する患者自身の理解を助けることに加え、刻一刻と生じる不安や疑問に対して自発的に対応できるための意志決定と自立支援に関わる情報提供等を行うことにより、日本全国のがん患者に質の高いがん医療を普及させることである。本年度の分担研究は昨年度の「試作版」の試験配布を通してのアンケート調査をもとに、栃木県内のがん情報ネットワーク構築を行い、周知・普及対象を広げることとその評価を目標に策定された。

市民公開講座『がん「患者必携」－栃木の取り組み－』の開催は、「（がん臨床研究事業）研究班」と栃木県との共催で行う企画で計画され実行できたことは一つの地域モデルの提示と考えられた。参加者の反響も基調講演者の提言に対して「共感や学びを受けた」と概ね良好であった。また、「患者必携」の配布・普及目的のひとつである自立支援という意図

に対しても深い理解を示した意見もあった。

次年度に向けた取り組みとしては研究班との共同研究として、アンケート調査協力を前提として患者に「患者必携」市販本を無料提供し、「患者必携」を使用することで活用度などに関する患者による評価と医師による臨床情報を組み合わせ総合評価する方法や患者・家族支援者であるコメディカルを対象にした研修会では、単なる講演会ではなく「患者必携」に触れ、使用することで今後の活用まで踏み込んだ形式とし、アンケート調査を行うことで

支援する側の視点もみえるような工夫が必要と思われる。

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

E. 結論

市民公開講座『がん「患者必携」－栃木の取り組み－』を開催し、「患者必携」の周知・普及に努めた。また、二次医療圏健康福祉センターにおける研修会を媒体としたがん情報提供を行うことを県健康増進課との連携で行なわれた。これらの企画は効果が認められた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1, 論文発表

なし

2, 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

みんなで作ろう、地域で支えよう、 がん患者さん支援の輪

がん患者必携 栃木の取り組み

2010年11月7日(日)

開演 13:00~(開場 12:30~)

会場 栃木県立がんセンター 講堂

対象 栃木県民 (一般市民、医療従事者ほか)



参加要項

参加をご希望の方は、参加申込書にご記入のうえ、FAXでお申し込みください。

(定員になり次第、申込み受付を締め切らせていただきます。)

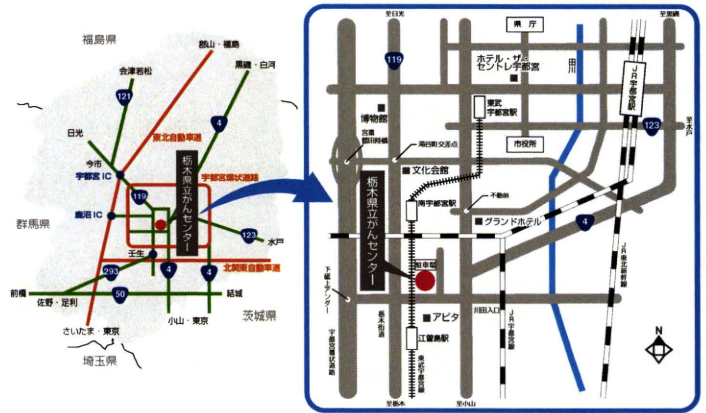
- 定員 150名
- 参加費 無料
- 申込期限 平成22年10月22日(金)
- お問い合わせ・申込先

栃木県保健福祉部健康増進課生活習慣病医療担当

TEL 028-623-3095 FAX 028-623-3920

栃木県立がんセンター相談研修課(がん情報・相談支援センター)

TEL 028-658-6484 FAX 028-658-5297



プログラム

開会の挨拶 加藤 和英 (栃木県保健福祉部 健康増進課長)

進行係 松本 秀一 (栃木県保健福祉部健康増進課)

第1部

(13:05 ~ 14:45)

基調講演

「地域社会でのがん患者支援」

司会 児玉 哲郎 (栃木県立がんセンター 所長)

第2部

(15:00 ~ 16:00)

ディスカッション/ 会場との質疑応答

「がん患者と医療者の合い言葉

患者必携」

司会 渡邊 清高

メンバー：本田 麻由美、寺脇 立子、
渡辺 晃紀 (健康増進課)、
清水 秀昭

コメンテーター：河野 順子
(栃木県看護協会 会長)

経過説明

「みんなで作る、地域で支える、
がん患者さんの支援の輪を広げるために」

渡邊 清高 (国立がん研究センターがん対策情報センター 室長)

都道府県がん診療連携拠点病院の立場から

「栃木県立がんセンターとしての取り組み」

清水 秀昭 (栃木県立がんセンター 病院長)

サポートの立場から

「地域がん診療連携拠点病院 相談支援センターの
活動を通して」

寺脇 立子 (上都賀総合病院 医療ソーシャルワーカー 兼 がん相談員)

がん患者/ジャーナリストの立場から

「乳がん闘病体験から考える患者支援と
最近のがん対策の動き」

本田 麻由美 (読売新聞社会保険部 記者)

..... 14:45 ~ 15:00 休憩

閉会の挨拶 児玉 哲郎

共催 栃木県

厚生労働科学研究費補助金 (がん臨床研究事業) 地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班

後援 栃木県医師会 栃木県病院協会 栃木県看護協会 栃木県薬剤師会

みんなでつくろう、地域で支えよう、 がん患者さん支援の輪

がん**患者必携** 栃木の取り組み

2010年11月7日(日)

開演 13:00～(開場 12:30～)

会場 栃木県立がんセンター 講堂

対象 栃木県民 (一般市民、医療従事者ほか)

参加要項

参加をご希望の方は、参加申込書(裏面)にご記入のうえ、FAXでお申し込みください。

(定員になり次第、申込み受付を締め切らせていただきます。)

- 定員 150名
- 参加費 無料
- 申込期限 平成22年10月22日(金)
- お問い合わせ・申込先

栃木県保健福祉部健康増進課生活習慣病医療担当
 栃木県立がんセンター相談研修課 (がん情報・相談支援センター)
 (電話・FAX番号は裏面をご覧ください)



共催 栃木県
 厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)
 地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する
 介入モデルの作成に関する研究班

後援 栃木県医師会
 栃木県病院協会
 栃木県看護協会
 栃木県薬剤師会

プログラム

進行係 松本 秀一 (栃木県保健福祉部健康増進課)

開会の挨拶 加藤 和英
 (栃木県保健福祉部健康増進課長)

第1部 基調講演
「地域社会でのがん患者支援」
 (13:05 ~ 14:45) 司会 児玉 哲郎
 (栃木県立がんセンター 所長)

経過説明

**「みんなでつくる、地域で支える、
 がん患者さんの支援の輪を広げるために」**
 渡邊 清高
 (国立がん研究センターがん対策情報センター 室長)

都道府県がん診療連携拠点病院の立場から
「栃木県立がんセンターとしての取り組み」
 清水 秀昭 (栃木県立がんセンター 病院長)

サポートの立場から
**「地域がん診療連携拠点病院
 相談支援センターの活動を通して」**
 寺脇 立子
 (上都賀総合病院 医療ソーシャルワーカー 兼 がん相談員)

がん患者/ジャーナリストの立場から
**「乳がん闘病体験から考える
 患者支援と最近のがん対策の動き」**
 本田 麻由美 (読売新聞社会保障部 記者)

..... 14:45 ~ 15:00 休憩

第2部 ディスカッション/
 会場との質疑応答
**「がん患者と医療者の合い言葉
 患者必携」**
 (15:00 ~ 16:00)

司会 渡邊清高
 メンバー: 本田 麻由美、寺脇 立子、
 渡辺 晃紀 (健康増進課)、
 清水 秀昭
 コメンテーター: 河野 順子
 (栃木県看護協会 会長)

閉会の挨拶 児玉 哲郎

参加申込

FAX:028-658-5297

みんなでつくろう、地域で支えよう、 がん患者さん支援の輪

がん患者必携 栃木の取り組み

この用紙に必要事項
を記入し、FAXで
お申し込みください。

申込書

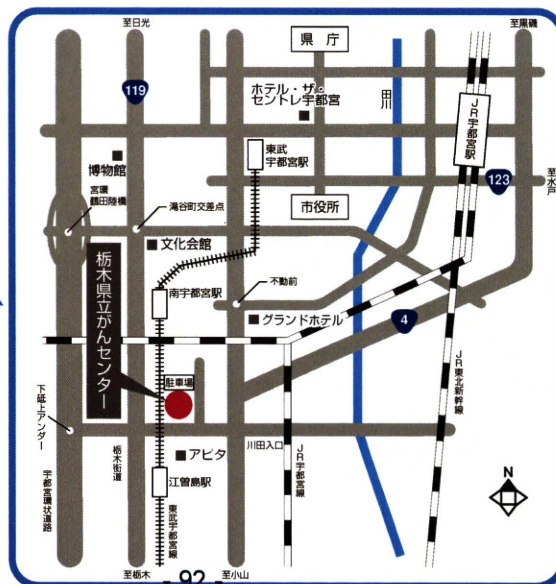
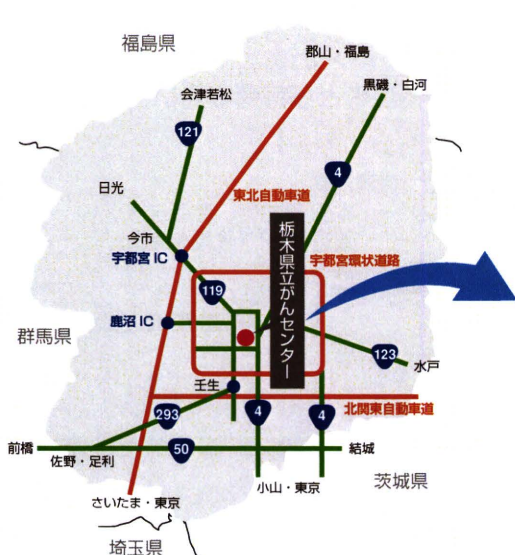
氏名		
住所	〒	
連絡先	TEL () ()	FAX () ()
属性	*該当する箇所に○をつけてください 一般 医療従事者 → 勤務先名 _____	

参加要項

- 定員 150名
(定員になり次第締め切らせていただきます。)
- 参加費 無料
- 申込期限 平成22年10月22日(金)

- お問い合わせ・申込先
栃木県保健福祉部健康増進課生活習慣病医療担当
TEL 028-623-3095 FAX 028-623-3920
栃木県立がんセンター相談研修課
(がん情報・相談支援センター)
TEL 028-658-6484 FAX 028-658-5297

アクセスマップ



栃木県立がんセンター

〒320-0834
 栃木県宇都宮市陽南4-9-13
 電話：028-658-5151

交通機関

- JR 宇都宮駅から関東バス「江曾島行(11番のりば)」に乗り「がんセンター前」で下車。横断歩道渡る。徒歩1分(所要時間約25分)
- 東武江曾島駅東口から関東バス「JR宇都宮駅行」に乗り「がんセンター前」で下車。徒歩1分(所要時間約5分)

資料 3

アンケート用紙

本日は講演会にご来場くださりまして、ありがとうございました。今後こうした取り組みを県内、さらには全国に向けて拡げていくために、本日のご意見・ご感想などをお聞かせください。

1. 講演会の「内容」について

数字に○をつけてください

1.....2.....3.....4.....5
全く役に あまり役に 普通 役に立った 大変
立たなかった 立たなかった 役立った 役に立った

【ご意見・ご感想】

2. 講演会で、新しく知った点や興味深く感じた点があればおしえてください。

➡➡裏面に続きます➡➡

3. 講演会で、もっと詳しく知りたかった点や深く議論したかった点がありましたらおしえてください。

4. 「栃木県版 地域の療養情報」に取り入れてほしい情報やテーマなどありましたら、こちらにお書きください。

5. 現在または過去に、ご自身、ご家族や周囲にがんにかかっている方はいらっしゃいますか。

- いる （当てはまるものすべての番号を○で囲んでください）
- ▶1. 現在、自分ががんにかかっている
 - ▶2. 過去に、自分ががんにかかっていた
 - ▶3. 現在、家族にがんにかかっている人がいる
 - ▶4. 過去に、家族にがんにかかっている人がいた
 - ▶5. 家族ではないが、現在、周囲にがんにかかっている人がいる
 - ▶6. 家族ではないが、過去に、周囲にがんにかかっている人がいた
 - ▶7. 自分や家族などが、がんではないかと疑っている
- いない

6. 講演会をどのような方法でお知りになりましたか。当てはまるものを○で囲んでください。

ポスター	チラシ	新聞	広報	県のホームページ
がんセンターのホームページ		メール	テレビ	ラジオ
人から聞いた（				）から
その他（				）

以上です、ご協力ありがとうございました。

共催 栃木県

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班

資料 4

地域保健福祉等関係職員研修会アンケート

平成22年11月4日（木）

今後の研修の企画・運営のために、本日の研修についてご意見・ご感想をお聞かせください。

1 職種： 看護師 ・ 保健師 ・ 介護支援専門員 ・ その他 []

2 今回の研修会に参加した動機は何ですか。（複数回答可）

- ① がん対策の最新情報について知りたかったため
- ② 地域におけるがん患者支援について知識を深めたかったため
- ③ がん患者支援で疑問や困難を感じていることがあったため
- ④ 他職種の活動等について情報を得たいと思ったため
- ⑤ その他 []

3 研修会の内容はいかがでしたか。

- ① 大変参考になった
 - ② 参考になった
 - ③ あまり参考にならなかった
 - ④ 全く参考にならなかった
- （理由・感想等）

4 今回の研修会の内容は、今後のがん患者支援に活用できますか。

- ① 十分活用できる
 - ② 活用できる
 - ③ あまり活用できない
 - ④ 全く活用できない
- （理由等）

5 今後、希望する研修テーマ等がありましたらご記入ください。

[]

6 その他、自由意見

[]

ありがとうございました

ケアサービス関係者研修会アンケート

資料 5

平成 22 年 12 月 9 日 開催

本日はお忙しいところ、研修会の参加お疲れさまでした。
今後の研修会の企画運営に参考とさせていただくため、アンケートにご協力をお願いします。
皆様方の忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせください。

参加区分 ※ 該当する記号に○をつけてください。

- ア 介護保険関係施設（入所サービス）の管理者（管理的立場にある者を含む）及びケア従事者
- イ "（居宅サービス）"
- ウ 地域包括支援センター職員
- エ 市町職員
- オ その他（ ）

貴施設の状況 ※ 該当する記号に○をつけてください。

- (1) 貴施設において、末期がん患者への支援状況についてお尋ねします。
日ごりの活動の中で、末期がん患者の方を支援したことがありますか。

ア ある イ ない

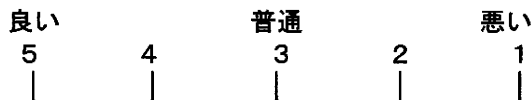
↓ 「ア ある」と答えた方

支援を行う上で苦慮したこと、不安なことについてご記入ください。

[]

研修内容 ※ 該当する番号に○をつけてください。

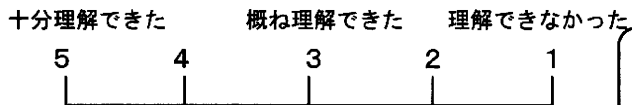
- (1) テーマの設定について



具体的には

[]

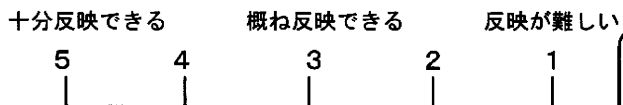
- (2) 講演及び情報提供の理解について



具体的には

[]

- (3) 業務への反映について



具体的には

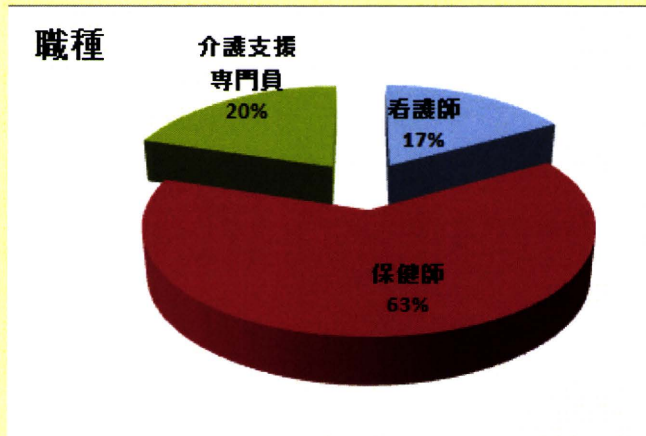
[]

感想・意見 ※本日の研修会のご意見・ご感想、今後の研修への要望等についてご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

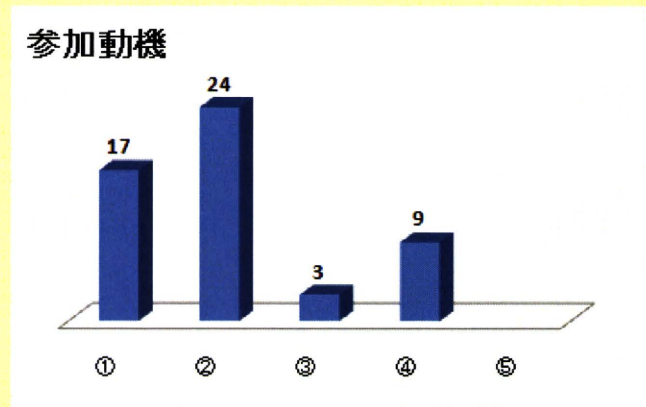
地域保健福祉等関係職員研修会アンケート
回収 30名

1. 職種



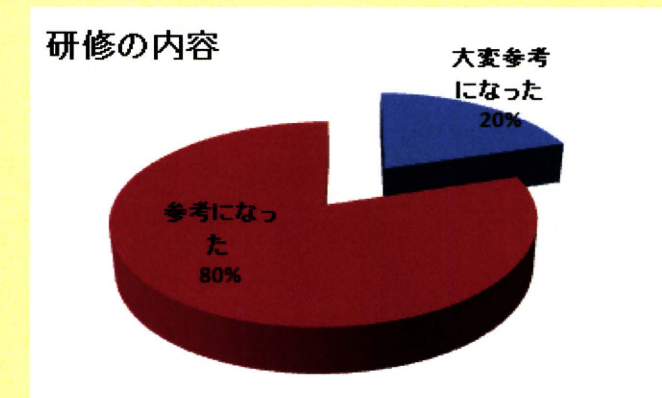
2. 今回の研修会に参加した動機は何ですか。(複数回答可)

- ① がん対策の最新情報について知りたかったため
- ② 地域におけるがん患者支援について知識を深めたかったため
- ③ がん患者支援で疑問や困難を感じていることがあったため
- ④ 他職種の活動等について情報を得たいと思ったため
- ⑤ その他



3. 研修会の内容はいかがでしたか。

- ① 大変参考になった 6
- ② 参考になった 24
- ③ あまり参考にならなかった
- ④ 全く参考にならなかった

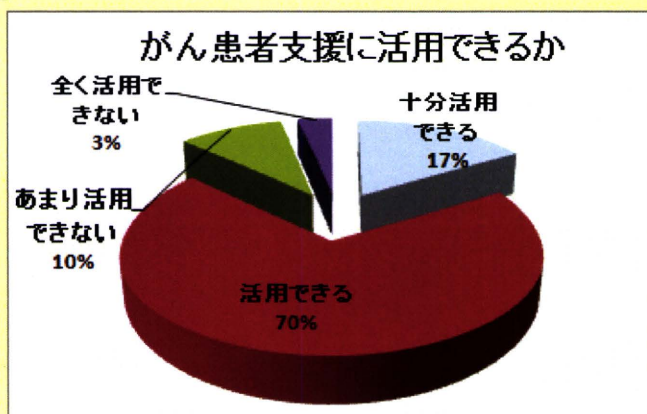


【理由・感想等】

- ・ 直接、業務に生かせる内容だった。
“患者必携”を使用しながら患者、家族、主治医、訪問看護等サービス事業所の担当者とも連携を図り支援できると思った。
- ・ “患者必携”などの情報が得られた。
- ・ 最新のがん対策を知る良い機会になった。
- ・ がん相談支援センターの存在と場所の情報が得られたため。
- ・ 若いがん患者の場合など、今までは在宅に関する知識もなく退院していたので、大変良いことだと思う。

4. 今回の研修会の内容は、今後のがん患者支援に活用できますか。

① 十分活用できる	5
② 活用できる	21
③ あまり活用できない	3
④ 全く活用できない	1



【理由・感想等】

- ・ 直接、業務に生かせる内容だった。
“患者必携”を使用しながら患者、家族、主治医、訪問看護等サービス事業所の担当者とも連携を図り支援できると思った。
- ・ 大変だと思うが、退院時やがんと診断された初期に関わる連携室の職員の方々に頑張っていたらと思う。
- ・ がん患者さんと接する際に情報を伝えていきたい。
- ・ 予防活動が中心なので、すぐに活用するのは難しい。
今後活用する機会はあると思うので、情報として把握しておきたい。
- ・ 活用する機会がない。情報として提供できればしたい。
- ・ 保健師として何をすればよいのかよくわからなかった。

5. 今後、希望する研修テーマ等がありましたらご記入ください。

- ・ 難病患者に関する研修をしてほしい。
- ・ がん支援に対する直接的な手法、プランについて。
- ・ 30～40代のひきこもりに対する支援、対応を学習したい。

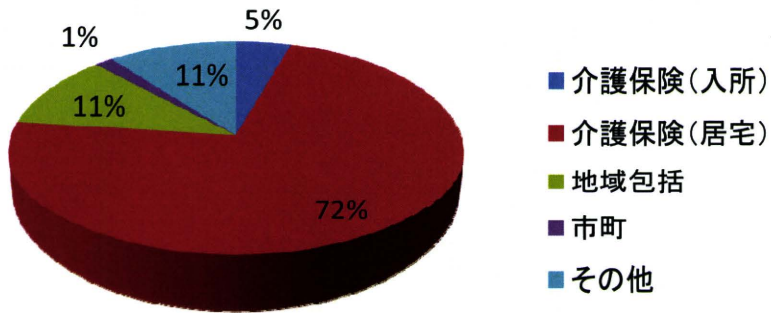
6. その他、自由意見

- ・ 冊子があると情報の振り返りができて便利だと思った。
医師から伝えられた言葉などは忘れやすいため、紙面に残しておくことで確認できて良いと思った。
- ・ 職種異なる方の意見も伺えて良かった。

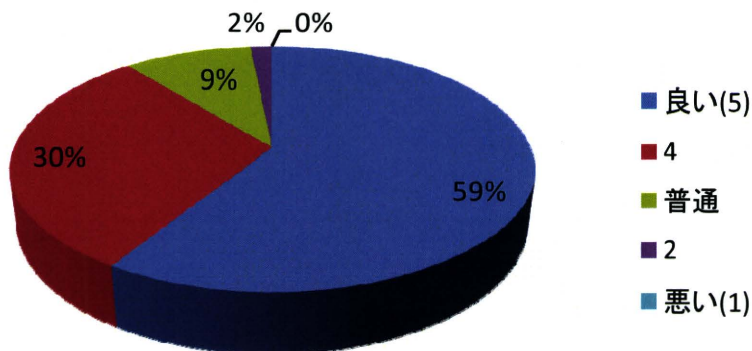
ケアサービス関係職員研修会 アンケート結果

回収 67名

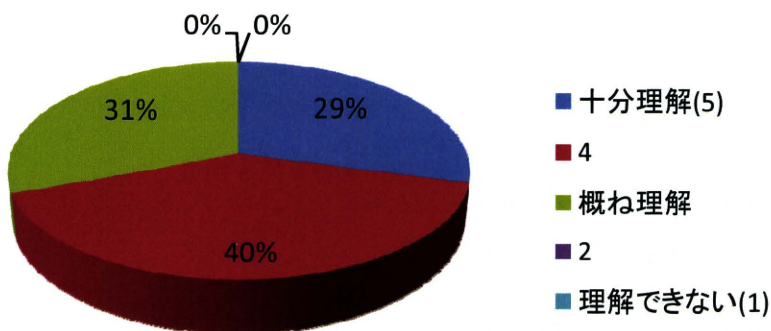
参加区分



テーマ設定



理解度



自由記載

支援上の苦勞したこと

- ・体調が急変しサービスがおいついていかない
 - ・病状把握したいが、訪看や往診時にたびたび同席していいものかと考えている
 - ・退院が決まっていたのだが、進行が早く退院日がのびて、あまり在宅にいられなかった。タイミングが難しい。
 - ・服薬管理、カテーテル管理、転倒予防(副作用による)に注意している。
 - ・病状の進行の早さ、急変時の医療機関への連絡方法
 - ・痛みのコントロール、本人の病識、告知などによる対応方法
 - ・在宅における訪問診療などの連携、救急時の対応・体制、退院前の調整など窓口となるところが限られると情報収集がしにくい
 - ・退院日程が決まっても、介護認定の申請が入院中にアドバイスされず、急いでサービス開始につなぐケースが多いので対応に困る。
 - ・動けなくなったときの生活の場の確保の心配。激痛時の対応
 - ・さまざまな身体症状があるとき、急変するのではないかと不安。
 - ・体調不良時の声かけや負担にならないような気配りをした。独居の人は、一人になったときの体調変化時が不安。
 - ・精神的な援助ができなかった。
 - ・訪看との連携。急変時の対応。
 - ・痛みが強くなった際の本人・家族への精神的支援。入院や受診の見極め。
 - ・がんに対する本人、家族の捉え方の相違。入院か看とりかの心の葛藤。
 - ・黄疸による入浴の苦慮。利用中の急変。
 - ・痛みの訴えをあまりいわない利用者
 - ・言葉かけ
 - ・退院のタイミング、症状コントロール等。本人、家族が納得したうえで調整が必要だが、時間がかかると時期を逃してしまう。
 - ・患者、家族の精神的なかかわり。疼痛コントロール。
-
- ・在宅で往診や相談できる医師がいない。
 - ・24時間以内に対応してもらえない
 - ・往診してくれる医師が見つからない。
 - ・在宅での医師の受け皿がなく不安がある。
 - ・在宅医療の確保、バックベットの含めた問題
 - ・医療の受け皿がない。本人・家族がア委託でケアを受ける心構えやリスクを把握していない
 - ・医療との連携や訪問診療を行ってくれる医師がいない。
 - ・ホームドクターがいない。
 - ・往診してくれる医師や訪問看護を見つけること。
 - ・緊急時の対応、主治医との連携
 - ・在宅で診療してくれる医師がいない。(麻薬が処方できない)
-
- ・本人希望と家族の希望がちがう場合
 - ・家族間の考え方の違い
 - ・家族を含めての支援
 - ・本人と家族の意向が違っていた。早急なサービスが必要な時、家族の理解が得られなかった。
 - ・どの時点で入院を勧めるか。
 - ・ヘルパー支援時、入院先の医療機関で指導を受けたり、急変時の連絡体制を調整した。
 - ・緩和ケアについてとてもわかりやすかった。他職種連携が大切と実感した。

研修内容

テーマ設定

- ・末期患者の支援を担当したとき参考になる
- ・末期患者の支援を担当したとき参考になる
- ・がん患者が増えている中で興味のあるテーマだった。
- ・今後増えていくと思われる在宅緩和ケアへの対応に有効であった。
- ・支援経験がないため、参考となった。
- ・末期がん患者の介護サービスの利用が多くなっている。
- ・テーマに興味があった。退院調整の具体例について深く学びたかった。

理解度

- ・医療機関でも努力してくれているのがわかった。
- ・患者必携は読んでおくべきものかどうかわからなかった。
- ・緩和ケアの定義について理解できた。
- ・わかりやすく説明してくれた。
- ・在宅でも、病棟にしても、チームケアの大切さを感じた。
- ・具体的で良かった。
- ・声が聞き取りにくい。専門的な話し方であった。

業務への反映

- ・在宅に戻ったとき、痛みの緩和を中心に計画を作成していくことも考慮する。
- ・何かの時にがんセンターと連携がとりやすくなった気がする。
- ・在宅に戻ったとき、痛みの緩和を中心に計画を作成していくことも考慮する。
- ・在宅に戻ったとき、痛みの緩和を中心に計画を作成していくことも考慮する。
- ・病院、医師との連携は難しいと感じていたが今後がん患者と関わるがあるので活用していきたい。
- ・在宅に戻ったとき、痛みの緩和を中心に計画を作成していくことも考慮する。
- ・末期がんの患者という死に向かうケアを考えていたが、研修会に参加して考えがかわった。

その他

- ・研修を受けて、がんセンターから退院されるときに連携がとりやすくなった。
- ・終末期を在宅で過ごす方が多くなった。住み慣れた地域で安心して療養できるよう勉強しながら関わっていききたい。
- ・そのためにも連携を図ることが大切。
- ・緩和ケアについて間違った認識をしていた。
- ・病院と少し近づけて連携がとれれば良いと思った。
- ・がんセンターが身近に感じ、医療連携の強化をしていきたい。ケアマネとして足を運びたい。
- ・在宅診療をする医師が化が居られており、もっと身近になってほしい。
- ・顔の見える関係ができたと思う。
- ・新しい情報共有できた。
- ・大変勉強になった。
- ・もっと医療の内容を知りたかった。
- ・緩和ケア病棟の見学のほうが、本日の講義より理解できた。
- ・在宅緩和ケアに対応できる医師がまだまだ少ない現状でできることは限られている。顔の見える関係を築くことができるようになるのが一番である。信頼できる医師が増えてほしい。
- ・在宅での看とりに対応してくれる医師や訪看が限定されていたり、独居や経済的なことがあれば余計に大変なことがあると感じた。
- ・退院調整についてはもっと進んでいる病院の話を知ることができた。
- ・がんセンターの役割、システムを知ることができた。

がん医療における連携パスとがん患者必携の関係に関する検討

研究分担者 谷水正人 国立病院機構四国がんセンター 統括診療部長

研究要旨

本研究班で作成されたがん患者必携の「わたしの療養手帳」と「がんの地域連携クリティカルパス」で示された連携パスの「私のカルテ」を比較し、利用者からみた患者情報携帯（共有）の課題を検討した。がん患者必携の「わたしの療養手帳」の位置づけは、全経過を通して利用する疾患管理ノートであり、患者の自己記入を想定している。それに対して、連携パスの「私のカルテ」は治療計画に沿った情報を共有するツールであり、医療者、患者の共同記録を想定している。しかし両者には重複する項目が多く、利用者に混乱を生じさせる可能性がある。今年度は愛媛県版の前立腺がん術後連携パスを例に、「私のカルテ」は治療計画に基づく連携に必須の療養記録情報に限定する方向で整理を試みた。その結果、前立腺がん術後連携パスは29項目から7項目に減らすことになった。実際の利用により両者の利便性をアンケート調査等により検討し、連携パスの「私のカルテ」のあり方を模索しつつ、「わたしの療養手帳」のあり方を提言していきたい。

A. 研究目的

がん患者必携とがんの地域連携クリティカルパス（連携パス）の関係を考察し、利用者側（患者・家族側）からみた活用方法を明らかにする。

B. 研究方法

本研究班で試作版として作成されたがん患者必携の「わたしの療養手帳」と「全国のがん診療連携拠点病院において活用可能な地域連携クリティカルパスモデルの開発に関する研究」（H20-がん臨床一般-002）で示された連携パスのひな型

（<http://soudan-shien.on.arena.ne.jp/hina/index.html>）の患者情報を比較し、利用者からみた患者情報携帯、共有のあり方を考察した。

（倫理面への配慮）

本研究では患者情報、個人情報とは研究対象としないため、各成果物そのものは個

人情報保護には接触しない。

C. 研究結果

1. がん患者必携の「わたしの療養手帳」に記載される患者情報：

第1部から第4部に渡って以下の患者情報が記載できるように構成されている。

項目：病名（がんの部位）、がんの大きさや広がり、転移の有無、転移の場所、病期、かかっている医療機関、のんでいる薬、治療法、期待される効果、副作用や後遺症、治療の名前、内容、日程、治療の目標、予想される合併症・後遺症、担当の医師、治療費、必要な書類や手続き、「治療と体調の記録」、「退院後の生活で気をつけること」、「今後の治療/検査の予定をまとめる」、「あなたがかかる医療機関一覧」、「受診時に伝えたいこと、質問したいこと」、「担当医からの説明の記録」、「薬や体調のことを記録」、「治療・療養生活のバランス」、「自分が大切

にしたいこと」、「あなたを支えてくれる場所の一覧」、治療年間スケジュール、週間スケジュール、「薬の一覧表」。

2. 連携パスに記載される患者情報：愛媛県がん診療連携協議会が開発した「前立腺がん術後連携パスの私のカルテ」に記載される患者情報を確認した。

項目：はじめに、患者基礎情報、連携医療機関の一覧、前立腺の構造と機能、がんと肥大症のちがい、前立腺がんの症状、前立腺がんは年々増加している、前立腺がんは高齢になるほど増える、検査による早期発見が生存率を高め、前立腺がん発見のために必要な検査、早期発見に血液検査（PSA 検査）、直腸診、経直腸的超音波（エコー）検査、経直腸的超音波ガイド下前立腺生検、前立腺がんはひそかに進行します、このような治療法があります、手術、前立腺全摘出術、放射線療法、前立腺がん小線源療法、抗がん剤療法、ホルモン療法、前立腺がん治療後のワークフロー、前立腺がん連携パス 内分泌療法・全摘出後、前立腺生検結果、PSA（前立腺特異抗原）の経過、画像検査等、患者さん用メモ、医療者用連絡メモ、がん相談窓口のご案内、の 29 項目が設けられていた。

3. 両者の視点の相違と患者が持つ情報携帯としてのあり方：

がん患者必携の「わたしの療養手帳」の位置づけは、全経過を通して利用する疾患管理ノートであり、患者の自己記入を想定していた。それに対して、連携パスの「私のカルテ」は治療計画に沿った情報を共有するツールであり、医療者、患者の共同記録を想定していた。

今回の検討では、「疾患の解説は「がん患者必携」に譲り、「わたしのカルテ」は連携の計画表とチェック表、記録表にスリム化するのがよい」と仮に判断して項目の整理を図った。

その結果、前立腺がん術後連携パスの項目は、はじめに（おねがい）、私の情報（手術結果）、連携する医療機関、共同診療計画書、自己チェックシート、相談窓口の案内、医療者間連絡メモ、の 7 項目に整理され、A5 版の冊子としては 44 ページから 33 ページにスリム化された。愛媛県では県内統一パスとして疾患の一般的な説明も含めた「私のカルテ」が開発され、当面はまずそちらが優先されるが、本研究で整理した連携パスは四国がんセンターで試験運用する。

D. 考察

「わたしの療養手帳」と「連携パスの私のカルテ」は患者への情報提供、患者と医療者の情報共有・協働としては大いに期待されるツールである。両者には視点の相違があり、使い分けされていくことになるが、それら役割分担、情報携帯のあるべき姿（理想形）はまだ明らかではない。我々は本研究を通じ連携パスの「私のカルテ」のあり方を模索しつつ、「わたしの療養手帳」のあり方を提言していきたい。

E. 結論

がん患者必携のわたしの療養手帳とがんの連携パスの患者情報携帯のあり方について考察した。がん患者支援のための情報掲載のあり方は本研究班の重要な課

題である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 谷水正人 5大がんの地域連携 クリティカルパス開発の現況 (株)日本医学出版(東京) 編者 武藤正樹 地域連携コーディネーター養成講座 地域連携クリティカルパスと退院支援 17-24 2010
 2. 谷水正人 がん医療連携パス 基盤整備に課題 Medical ASAHI 10月号 22-23 2010
 3. 谷水正人 5大がんの地域連携クリティカルパス開発の現状と課題 多摩消化器シンポジウム誌 25(1):5-8 2011
 4. 谷水正人, 成木勝広, 大中俊宏 病院が中心となって取り組んでいる事例 四国がんセンター:がんの連携 日本医師会雑誌 139巻・特別号(1) S300-S303 2010
 5. 谷水正人, 河村 進 5大がん地域連携クリティカルパスとコーディネータ機能の必要性 (株)じほう (東京) 日本医療マネジメント学会監修 がん地域連携クリティカルパス がん医療連携とコーディネータ機能 47-53 2010
2. 学会発表
1. 谷水正人 がん連携をサポートするコーディネータ機能の必要性 第 12

回日本医療マネジメント学会
2010.6.11 札幌市

2. 下村裕見子, 池田俊也, 武藤正樹, 谷水正人 がん地域連携クリティカルパスの理解度と連携実務者に期待する役割 第 12 回日本医療マネジメント学会 2010.6.11 札幌市
 3. 下村裕見子, 池田俊也, 武藤正樹, 谷水正人 がん診療連携拠点病院等におけるがん診療の連携の課題 第 12 回日本医療マネジメント学会 2010.6.11 札幌市
 4. 下村裕見子, 池田俊也, 武藤正樹, 谷水正人 がん診療連携拠点病院等におけるがん地域連携クリティカルパス調査 第 12 回日本医療マネジメント学会 2010.6.11 札幌市
 5. 青儀健二郎, 谷水正人, 河村進, 新海哲 乳がんの地域連携パス運用上の問題点ー連携コーディネーターの活用ー 第 48 回日本癌治療学会学術集会 2010.10.28 京都市
 6. 谷水正人 がんの地域連携パス 第 34 回日本死の臨床研究会年次大会 2010.11.6 盛岡市
 7. 谷水正人 がんの地域連携パス 第 72 回日本臨床外科学会総会 2010.11.22 横浜市
 8. 谷水正人, 藤井元廣, 櫃本真事, 松野剛, 梶原伸介, 亀井治人, 原雅道 愛媛県がん診療連携協議会によるがんの地域連携パス開発の現状と課題 第 11 回日本クリニカルパス学会学術集会 2010.12.4 松山市
- H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし